令和元年度　洋野町立種市小学校　《発行日：令和元年１２月　６日》

校報 水緒

No. 1267

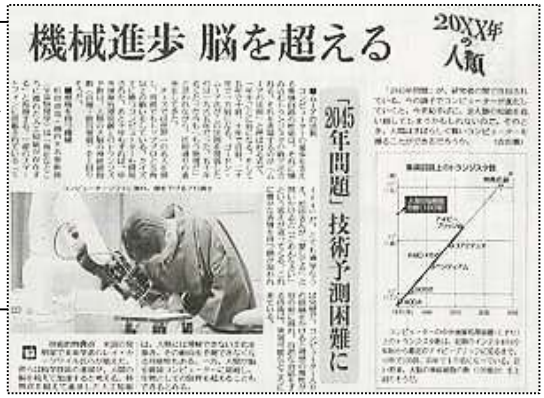
元年度・第１２６号

「ＡＩ時代に淘汰されない学力」とは

パート２

1266 号に続き、ＡＩ時代に淘汰されないための学力について、紹介していきます。
「ＡＩ」を語るとき、避けて通ることができない１つに「２０４５年問題」があります。

「２０４５年問題」とは…
「人工知能（ＡＩ）」が「ＡＩ」を連鎖的に作り続け、
爆発的スピードでテクノロジーを自己進化させ、
人間の頭脳レベルではもはや予測不可能な未来が
訪れる。2045 年には人工知能が人間の知能を超える
という近未来予測です。


機械進歩 脳を超える
20XX年の人類
「2045年問題」技術予測困難に

この「２０４５年問題」が提起されたころから、
ますますＡＩ（人工知能）論議が沸騰しています。「ＡＩが神となる」、「ＡＩが人類を滅ぼす」、「ＡＩによってバラ色の人生が送られる」、「ＡＩによって、労働時間が減り、ゆとりある生活時間が確保できる」、「ＡＩによって失業者が増える」…

ＡＩは人類に幸せをもたらすのか、それとも逆なのかについて学者や専門家でも見解が分かれているところです。楽観論者と悲観論者に分かれての議論が今日も続いています。

前号の岩手日報の風土計で紹介されていた、数学者の新井紀子さんの著書「ＡＩvs.教科書が読めない子どもたち（東洋経済新報社）」では、残念ながら悲観的な近未来予想が描かれています。

ＡＩは神にも征服者にもなりません。ＡＩに仕事を取られて失業することも嘘。安心した。そう思われたでしょうが、残念ながら私の未来予想図はそうではありません。ＡＩが人間の仕事の全てを奪ってしまうような未来は来ませんが、人間の仕事の多くがＡＩに代替される社会はすぐそこに迫っています。つまり、ＡＩは神や征服者にはならないけれど、人間の強力なライバルになる実力は十分に培ってきている。（～略～）　では、ＡＩに多くの仕事が代替された社会ではどんなことが起こるでしょうか。労働市場では深刻な人手不足に陥っているのに、巷間には失業者や最低賃金の仕事を掛け持ちする人々が溢れている。結果、経済はＡＩ恐慌の嵐に晒される。　【要旨】

この本を書いた新井紀子さんは、国立情報学研究所教授や国立社会共有知研究センター長のほか、数年前に東京大学合格を目指した人工知能（ＡＩ）として話題となった「東ロボくんプロジェクト」の中心人物として、辣腕を振るわれた方で、人工知能（ＡＩ）研究の最前線で活躍されている、現役バリバリの科学者・研究者の方です。その方が語る「近未来予想」ですので、的外れな視点・論理だと楽観視することは全くできないことです。

新井さんは、今後ＡＩに多くの仕事が取って代わられることが予想されるが、そういう社会にあって人が活躍の場を確保し、より幸せに生きられるためのスキルとして、**「読解力」**に注目し、全国の学校、さらには社会人も含めて、文章などの意味をどの程度正確に読めているのかを見るリーディング・スキル・テスト（RST）という、世界中どこにも先行研究がない新しい発想のプロジェクト行いました。

【リーディング・スキル・テスト（RST）とは】

(1)主語述語や修飾語被修飾語など、文を構成する要素の関係（係り受け）の理解
(2)「それ」「これ」などの指示代名詞が何を示すか（照応）の理解
(3)２つの文が同じ意味を表すかどうかを判断する力（同義文判定）
(4)文の構造を理解したうえで、体験や常識、その他の様々な知識を動員して文章の意味を理解する力（推論）
(5)文章と図形やグラフを比べて内容が一致するかどうかを認識する力（イメージ同定）
(6)文章で書かれた定義を読んで、それと合致する具体例を認識する能力（具体例同定）

この６つの能力を判定する文章を４万人近い人（小中学生、高校生、大学生、上場企業の社員、中央官庁の官僚、新聞社の論説委員など）に実施した結論として、以下の３点を導いています

【リーディング・スキル・テスト（RST）から見えてきたこと、予想されること】

(1)教科書が読めてない子がたくさんいる。

文章を読んでいるようで、実はちゃんと読んでいない。キーワードをポンポンポンと拾っているだけ。『……のうち』とか『……の時』『……以外』といった機能語が正確に読めていない。実は、それはＡＩの読み方に近い。

(2)基本の読みとか論理的推論ができない子は、いくら知識を教えても、それを整合的に使えるようにならない。

・学力の差が、知識量とかやる気の問題であれば、「勉強したくなった時にやればいい」とも言えますが、そうではなくて『読める』かどうかが大きい。読めている人は、それほど痛痒なく受験勉強をやって入試を突破する。
・表層的理解はできるが、推論や同義文判定などの深い読解力を身につけないと、そこから先の成績は伸びない。
・「係り受け」、「照応」など、ＡＩでもある程度できる『表層的な読み』でなく、「１を聞いて１０を知る」ような『推論』の能力を身に付けることが大切。

(3)読めるか読めないかが格差を生む。

読めることで柔軟に職業を変えたり、自分の夢を実現することに役立つ。従来は人間がやっていた仕事の中にはロボットに取って代わられるものが出てくることが予想される中では、「読める」かどうかは、人生を大きく左右することになる。ＡＩにより、ホワイトカラー層は分断され、そして世界恐慌（ＡＩ恐慌）がやってくる。しかし、一筋の光明はあるが…。

次号以降では、リーディング・スキル・テスト（RST）の実際の例題を紹介しますので、ぜひ家庭内でも試してみてください。

私も実際に試してみて、例文の内容を理解し正解に至るまで案外時間を要するなどし、普段、文章をきちんと読まず、「キーワード読み」になっていた事を痛感させられました。

先月、本校の教職員にも試してみたところ、案外苦も無くすらすら正解を出していたので、安心しています。

〈次号以降へ続く〉